

# 1900年のオルゴールと 2019年の草たち

植物観察家

鈴木

純

すずき

じゆん



1900年にパリ万博に展示されたというオルゴールを聴きに、清里にある萌木の村オルゴール博物館に行ってきた。今の手乗りのオルゴールからは想像もつかないほどの大きさと、その豪華な装飾にまです圧倒される。野外で2km先にまで届いたという音色には、じっくり聴き入るよりも、のけ反って驚いてしまうほどの迫力を感じた。続いて説明を聞いて納得。録音再生技術が発達していない時代において、オルゴールは音楽を楽しむための最先端技術だったのだという。当時はこのオルゴールを聴くために多くの人が集まったというのだから驚きだ。100年以上前の人々がオルゴールの音色に身を委ねる姿を想像すると自然と口もほころんでくる。

## 人はどこまで行けば満足するのだろうか

想像上のすてきな気持ちのままに博物館を出て

ぐに足元を見下ろす。そこにはいつもと変わらぬ様子で生きる草たちがいた。彼らの様子を見ながら、ふと、人はどこまで行けば満足するのだろうか、と思う。私たちは今、オルゴールで満足できた時代からは比べ物にならないほどぜいたくな世界に生きている。なにせPhone片手に世界中の音楽を高音質で聴ける時代なのだから。しかし私たちが現状に満足しているかどうか、と問われれば否であろう。誰もが次の革新を望み、さらなる便利を求めている。その道も楽しいことだと思う。私自身、そうした進歩の恩恵を受けて暮らしている。パソコンで原稿を書き、メールで送信すれば仕事完了。家から一歩も出ずに多くの人に自分の言葉を届けられるなんて、なんと恵まれた時代だろう。しかしそう感じる一方で、日々送られてくる連絡に翻弄され、便利になるほどかえって増えていく仕事に戸惑っている私がい

時の調べ  
Essay

るのもまた事実である。

## 「変わるなご」とごんごんの 価値を見いだす

仕事に疲れてくると私は外に出る。別に遠くに行くわけではない。玄関を開けて3歩も歩けば十分だ。そこには私の大事な友人であるオオバコやウラボシチチコグサなどが地を這うようにして生きている。彼らが地を這う理由はさまざま。過酷な都市環境における吹きさらしの風や、大きな寒暖差から身を守るように背丈を低くしているとも考えられるし、地を這っていけば草刈りが入っても生き延びられる



目立たないが、地を這うようにして秘かに生きているウラボシチチコグサ



よく見るとたくさんトゲトゲがついているコセンダングサの種。このトゲでズボンなどにくっつく

かもしれない。もう1歩進めばコセンダングサが、そのトゲトゲの種を準備している。ズボンの裾にでも触れることがあれば、その種は私にしっかりとくっついて、彼らと私は気付かぬうちに一緒に旅をすることになる。ほかにも目を凝らせば、小さなハートを3枚つけたカタバミが小さく帝国を築き上げていたり、花とは到底思えないような姿をしたコニシキソウが満開になって伸び伸び生きているのを発見したりする。それぞれの命は、それぞれの事情に応じた工夫をして生きていて、おそらくそれは1900年も2019年も同じようなものだっただろう。そうした姿を見て少し楽な気持ちになるときがある

のは、もしかしたらそこに「変わらない」ということの価値を見いだすからなのかもしれない。誰も見向きもしないこの草にこそ、これからの時代を楽しく生きるヒントがあるのではないか、などと思うのだ。

### 略歴

東京農業大学卒業後、中国で2年間砂漠緑化活動に従事。帰国後、日本各地に残る自然を100カ所以上訪ね歩き、フリーの植物ガイドとして独立。徒歩10分の道のりを100分かけて歩く植物観察会を中心に、保育の現場や企業のCSR活動まで幅広く活動。著書に『そんなふうにして生きていたのね まちの植物のせかい』（雷鳥社）。

